市民学びの会　大衆社会論オンライン研究会

大衆社会論への招待

【第２回】

群集の時代か、それとも公衆の時代か

――ル・ボンとタルドにおける見解の対立――

一　群集の時代の到来を予言したル・ボン

第１回では大衆社会論への入門的ガイダンスを行いましたが、第２回からは、いよいよ大衆社会論の主役たちが登場します。スペインの哲学者オルテガは、二〇世紀初頭に刊行された『大衆の反逆』（一九三〇）のなかで、二〇世紀は「大衆の時代」であると断言しました。実をいいますと、二人のフランスの学者が、オルテガより先に二〇世紀が一九世紀とは異質な社会形態になると予測していたのです。その二人のフランス人学者というのは、社会心理学者のギュスターヴ・ル・ボンと、社会学者のガブリエル・タルドです。今回の議論は、この二人の研究者の見解の対立をめぐって展開されることになります。

そのうちのひとり、群集心理の研究で知られるル・ボンは、一九世紀末に刊行された『群衆心理』（一八九五）のなかで、ヨーロッパにおいて一九世紀末から二〇世紀初頭にかけて、民衆階級の政治的進出がめざましく、その勢力が時々刻々に増大しつつある事実を踏まえて、いまわれわれが歩み入ろうとしている新しい時代は、「群集の時代」になると予言し、つぎのように述べていたのです。

現代こそは、人間の思想がまさに変化しつつある危機の一つをなしている。このような変化の根底には、二つの根本的な要因が存する。第一の要因は、文明のあらゆる要素が由来する宗教上、政治上、社会上の信念の破壊ということである。第二の要因は、科学上、

産業上の近代の発見によって生じた、全く新たな生活状態、思想状態の創始ということである。過去のさまざまな思想は、動揺させられたとはいえ、まだすこぶる有力であるし、しかもそれにとって代わるべき思想は、形成の過程にあるにすぎないから、現代は一種の過渡期、混乱期をなしている。従って、幾分混沌としたこのような時代から、将来どんなものが生まれてくるかを、さしあたって予言するのは容易ではない。（中略）しかし、今日から予想し得ることは、将来の社会が、その成立に際して、近代の最高主権者である新たな勢力、すなわち、群衆の勢力を重視せねばならぬであろうということである。（中略）旧来の信仰が動揺して、消滅し、また、社会の古い支柱が交互に崩壊しつつある際に、群衆の活動こそは、何ものにもおびやかされず、その威勢のますます増大する唯一の力となるのである。まさにきたらんとする時代は、実に「群衆の時代」とでもいうべきであろう（ル・ボン『群衆心理』講談社学術文庫）。

ここでル・ボンのいう群集（群衆）とは、その構成員すべてが意識的人格を完全に喪失し、操縦者の断言・反復・感染による暗示のままに行動するような集合体を意味しています。つまりル・ボンは、一八世紀の百科全書派の知識人たちが人間の理性に限りない信頼をおいていたのとは対照的に、人間の理性というものが極めて頼りないものであると考えていたのです。とりわけ、人

ギュスターヴ・ル・ボン（1841 - 1931）

フランスの社会心理学者．群集心理学を論じて，現代における社会心理学の源流の一つを担っている．もともと医者として出発したが，その広範な関心に導かれて考古学や人類学を遍歴し，しだいに社会心理学へとかたむいていった．かれの名を不朽なものにしたのは，1895 年の《群集心理》である．群集とは，そのなかですべての個人が意識的な人格を完全に喪失し，操縦者の暗示のままに行動するような人間集合体である．

ル・ボンは，当時のヨーロッパにおいて，19 世紀末から 20 世紀の初頭にかけて，民衆の政治的進出がめざましく，その勢力が時々刻々に増大しつつあった時期を，「群集の時代」と呼んでいる．これにたいして『世論と群集』の著者ガブリエル・タルドは，群集にかわって「公衆の時代」がこれからヨーロッパ社会を席巻するだろうと予言している．

間が群集という形をとって同じ行動をするところに彼のいう群集心理が生まれると考え、その群集心理が、独断、不寛容、自分に対する無力感、無責任さを生むというわけです。そしてル・ボンは、産業革命以後の社会現象の特徴が、人びとをこうした群集心理に追いやるものであると論じたのです。

ところで、ル・ボンは群集の行動や心理の研究をするさいに用いたデータを、どこから得たのでしょうか。ル・ボンにはフランス革命の研究書があることからわかるように、彼は一七八九年のフランス大革命とその後のナポレオンの出現、一八一五年の第二王政復古、一八三〇年の七月革命、そして一八七一年のパリ・コミューンなどにおける民衆の行動から影響を受けていることは明らかですが、彼が直接依拠した資料の多くは、保守的な歴史家イポリット・テーヌの『現代フランスの起源』（一八七五―一八九四）に負っていることがわかっています（樺俊雄『革命の幻想』有信堂）。かれは群集の特性について、「衝動的で、興奮しやすく、推理する力のないこと、判断力および批判精神を欠いていること、感情の誇張的であること、その他こういう群衆のいくつかの特性は、野蛮人や小児のような進化程度の低い人間にもまた同様に観察されることである」（ル・ボン『群衆心理』講談社学術文庫）と述べており、群集を主として否定的にとらえる貴族主義的傾向があるのも、そこに由来していると思われます。

一九世紀の近代民主主義を支えていたのは、理性的な判断力をもった市民（シトワイアン）であり、「公衆（ル・プブリック）」であったのです。しかし、ル・ボンの目にした群集（ル・フル）は、理性的な判断力とはほど遠い存在で、「群集心理」に支配されて非合理的で破壊的な直接行動に出るような野蛮な人間の集合体であったのです。

しかしながら、現代のわたしたちから見るかぎり、今日の群集はル・ボンがいうような大きな脅威とはとうてい思えない存在になっています。群集は確かに現在も存在するし、群集心理は依然として非合理的なものであることに変わりはないと思われます。にもかかわらず、それは一九世紀末のように、もはや人々の注意や関心を引きつけるものではなくなっているのはなぜなのでしょうか。この疑問に社会学者の清水幾太郎はつぎのように答えています。

> それ（群集）が過去（一九世紀のヨーロッパ）において著しく目立ったのは、一方からすれば、個人の理性が深く信じられていたからであり、さらに、個人の理性が保たれる集団としての公衆への信頼があったからであろう。個人の合理性という純白の背景の前でこそ、群集の不吉な黒い姿は明瞭に浮き出ていたに違いない。そして、他方からすれば、強固な組織を持つ大きな集団が未だ十分な発達を遂げていなかったということもあろう。合理的に編成された巨人のような集団、なかんずく、その代表者たる国家の手に独占された強力な武器、未だそういうものが問題にならぬ場合は、確かに街上の群集は恐怖の対象である。これも、個

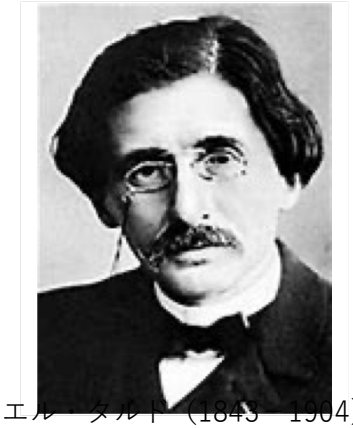
人の合理性への信仰とあいまって、群集が目立つための背景を形作る（清水幾太郎『社会心理学』岩波書店）。

二　二〇世紀は群集の時代ではなく公衆の時代である

――タルドによるル・ボン批判――

このように、二〇世紀は「群集の時代」になるというのがル・ボンの予想だったのですが、同時代のフランスの社会学者ガブリエル・タルドは『世論と群集』（一九〇一）のなかでル・ボンの見解を批判して、二〇世紀はル・ボンのいう群集の時代ではなく、公衆の時代になると主張しています。

群集は魅力的で、見る人の眼をいやおうなく奪うばかりではない。群集という名を聞いただけでも、現代の読者は引きつけられてしまう。そこで著述家のなかには、このあいまいなことばで、あらゆる種類の人間集団を意味させようとしすぎるかたむきがある。こういう混乱はやめてもらわねばいけない。ことに、群集と公衆とを混同してはいけない。（中略）印刷術が発明されてこのかたの現代は、まったくちがった種類の公衆を出現させた。



ガブリエル・タルド（1843－1904）

フランスの社会心理学者．パリ大学で法律を学び，裁判官の仕事の傍ら犯罪の研究に従事．1890 年に『模倣の法則――社会学的研究』を発表し，社会学を一般に受容させた人物の一人である．エミール・デュルケムが 1893 年の『社会分業論』においてタルドの模倣説を批判したのをきっかけに，分業が道徳的な事実であるか否か，犯罪が正常であるか否か，社会が実在するのか否か（社会実在論）といった多岐にわたる論点をめぐって論争が繰り広げられた．1901 年には『世論と群集』を刊行．ル・ボンの群集心理学を批判し，直接対面的な関係によって結合する群集に対して，メディアを介した遠隔作用によって間接的に結合する公衆概念を提示した．1895 年，パリ社会学会会長．1900 年，コレージュ・ド・フランス教授に就任．パリにて死去．

公衆はたえず増大し、その無限の広がりこそ、現代をもっともよく示す特徴のひとつとなっている。さて群集心理学はすでに建設され、あとには公衆心理学をつくる仕事が残っている（ガブリエル・タルド『世論と群集』未来社）。

それでは、タルドのいう公衆という新しい社会集団とは、どのような人々を指しているのでしょうか。また、それはどのようにして生まれたのでしょうか。この疑問に対してタルドは、群集と公衆を対比することで、それぞれの社会集団の特色についてつぎのように説明しています。群集の場合、その成員が空間的にまた物理的に近接していなければ存在できないのに対し、公衆は群集とはまったくちがって、「精神的な集合体で、肉体的には分離し心理的にだけ結合している個人たちの散乱分布である」（ガブリエル・タルド『世論と群集』未来社）とし、ここに両社会集団の決定的な違いがあると考えたのです。タルドは印刷術が発明されたことによって、コミュニケーション手段――当時は主なメディアは新聞と雑誌でした――が目覚ましく進歩したことにより、人々は間接的接触で集団を形成することができるようになったというのです。

つまり、タルドのいう公衆とは、識字率の低かった一九世紀のヨーロッパ市民社会で、ブルジョアと呼ばれていた資産と暇と教養のある富裕層だったのです。かれらには、日頃から新聞を読む習慣が身についており、サロンやカフェやクラブなどで親しい仲間と、文学や芸術、さらには世相や政治といった話題をめぐって議論を戦わせるというライフスタイルが身についていました。タルドは、ここから「公衆の意見（public opinion）」、すなわち、「世論」が生まれたと考えたのです。タルドは、フランス革命以降のヨーロッパ近代市民社会において、群集のもつ政治的・社会的な力が注目されるようになったことは認めながらも、新聞が出現したことによって、群集の直接行動（デモや破壊活動）に代わって、より理性的な世論が政治の世界で大きな役割を果たすようになると考え、つぎのように説いたのです。

新聞こそが、議会やクラブでの演説に翼を与え、全世界を飛びまわらせる。公衆の形をとった諸党派がどんどん国際化すると、相互の敵意はより恐るべきものになるかもしれない。（しかしその反面）恒久平和条約の希望さえもてるようになる。（中略）一社会内に共存し混合している公衆は多数で、あい異なっているにもかかわらず、いくつかの重要な点では部分的に一致し、いっしょになって一つの同じ公衆を形づくるようにみえる。この一致は「世論」とよばれ、その政治上の比重はたえず増大する（ガブリエル・タルド『世論と群集』未来社）。

ここまでの議論をまとめると、ル・ボンが、ヨーロッパ社会は「群集の時代」に突入しつつあると予想し、そこにおいては群集の勢力がますます強まり、政治の世界においてもかれらの存在は無視できないものとなると予言したのに対して、タルドは、印刷術の進歩により新聞という新しいメディアが生まれ、資産と余暇と教養のある市民社会のブルジョアたちが世論（公衆の意見）を形成し政治を動かすことになると反論したのです。ル・ボンの「群集」、とりわけ「群集心理」の観念が、民主主義にたいする絶望を現わしているとすれば、タルドの「公衆」の観念は、民主主義にたいする希望を告げるものであった。この意味では、タルドの「公衆」の観念は、清水のいうように一九世紀末以来の群集心理の研究に与えられた救いであったといえるでしょう。

公衆の観念が作り出されることによって、民主主義はル・ボンの加えた打撃から漸く立ち直る機会を掴んだのである。ル・ボンは、民主主義の基礎に群衆を発見し、群集の非合理性を暴露することによって、同時に、民主主義への不信を表明したのであった。民主主義を擁護しようと欲する人々が、タルドの指した道に従って、民主主義の基礎に群集の代わりに公衆を据えようと試みたのは自然の成り行きであったに違いない。ヴァイマール時代のドイツの研究者たちの努力は、もっぱらこの方向に属するものであった。公衆へのこうした信頼は、言うまでもなく、多くの人々の間接的接触の上に成り立つ近代的集団への信頼にほかならない。群衆のうちに亡びた理性と意志と創意とを、新しい平面と規模とにおいて生かす近代的集団への信頼である。事実、その後の半世紀を通じて、交通通信の技術は非常な進歩を遂げ、ジャーナリズムはマスコミュニケーション（mass communication）という名称を必要とするまでに発達した。そして、それに応じて、公衆もまた著しく拡大し発展し来っている。しかしながら、公衆は、今日にあっても、かつて多くの研究者がこれに託した、目覚めた理性、自由な意志、豊かな創意というものを有しているであろうか。孤独な個人は、この緩いかつ軽い結合のうちで、依然、その知恵を保持しているであろうか（清水幾太郎『社会心理学』岩波書店）。

三　清水幾太郎の「新しい群集」観念の提唱

ところで、二〇世紀に台頭してきた新しい支配的勢力をめぐる右にみたようなル・ボンとタルドの議論は、現代の大衆社会論のなかではどのように位置づけられることになるのだろうか。またこの点に関して、わが国における大衆社会論者はどのように考えていたのだろうか。まず、わが国で大衆社会論にいち早く注目した清水幾太郎は、大衆をタルドの公衆よりもむしろル・ボン

の群集に近い非合理的存在としてとらえ、それに「新しい群集」という呼称をつけています。

清水は、第二次世界大戦後のアメリカで盛んにおこなわれたマス・メディア研究の成果を踏まえ、二〇世紀に入ってテクノロジーが飛躍的に発展したことにより、マスコミの発達、ビュロークラシー（官僚制）の拡大、さらに集団の無政府状態が結果し、これら三つの側面が総合されるところに、一個の巨大な群集が出現したとし、つぎのように述べています。

三つの側面を有する夥しい個人と集団との群は、全体として、一つの群集にほかならない。私は、仮に、これを新しい群集あるいは大衆と名づけようと思う。新しい群集はタルド以来の公衆の観念の、いわば自己否定として生まれたものである（清水幾太郎『社会心理学』岩波書店）。

つまり、清水によれば、一九世紀の「公衆の時代」が終わり、その自己否定の結果として二〇世紀に入ってから「新しい群集」、つまり「大衆」の時代が成立したというわけです。戦後アメリカの大衆社会論者の一人、C・ライト・ミルズも、現代のアメリカ社会にあっては公衆という概念はもはや事実の描写ではなく、ある理想の主張であり、事実を装った正統化の主張であると述べ、現代アメリカ社会は公衆社会から大衆社会への道をかなり進んでいると結論づけている。かれの説明によれば、公衆社会と大衆社会の根本的なちがいは、つぎのようなコミュニケーションの様式にあるというのです。

公衆社会では、討論が支配的なコミュニケーションの手段であり、マス・メディアは、たとえ存在しているばあいにも、たんに討論を広め活発にし、面接関係にもとづく公衆（プライマリー・パブリック）を相互に結びつけるだけのものである。大衆社会では、支配的なコミュニケーションの型は、制度化されたメディア市場（メディア・マーケット）となる。すなわち、所与のマス・メディアの内容を受け取るだけの存在となる（C・ライト・ミルズ『パワー・エリート』ちくま学芸文庫）。**《この項、次回へ続く》**